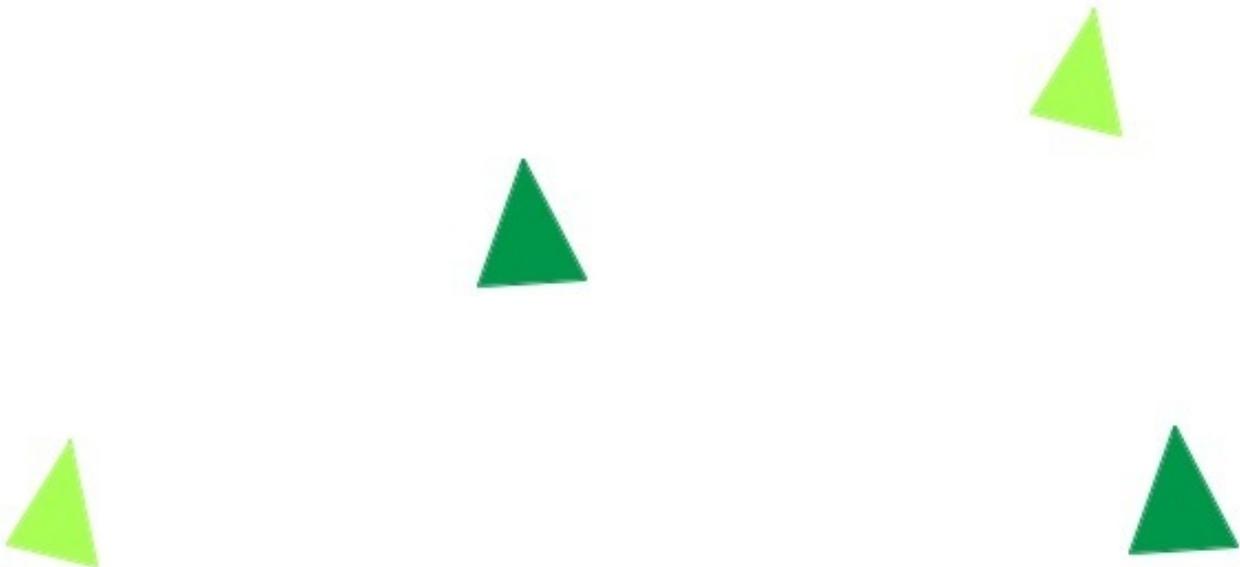




けむりのむこう



greentea0117



カニが食べたくなくて、温泉に行くことにした。思い立って旅行するなんて、初めてだ。旅行に行くといえば誰かに誘われ誰かのプランにのっかるか、何か月も前に計画を立てて予約するか、そんな感じ。でもいきなり衝動的にカニが食べたくなったのだ。

それは週の半ばだった。私は会社に適当な嘘をついて休むことにした。重要なプロジェクトが進行中で、普段の私なら休むなんてありえない。だいたい会社を休んだことは一度もなかった。学校もだ。だから電話をかける指先が少し震えてた。震える指に気付き、私は笑った。もしかしたらカニが食べたいというより『さぼる』ということをしてみたいのかもしれない。よくわからない。とにかく今の私は砂漠の旅人が水を欲するかのごとく、カニが食べたいのだった。

普段カニを食べる機会はほとんどない。一人暮らしなので、一人鍋をすることはあっても、わざわざカニは買わない。せいぜい豚肉だ。仲間うちで食べる時も、カニは登場しない。あと少し手を伸ばせば届きそうなのに、なかなか届かない。それがカニだ。

電車に飛び乗る。最初は頭がぐるぐるしていた。でも車窓を飛び去る景色を眺めているうちに眠ってしまった。

二時間ほど眠ったのだろうか。周囲の音で目が覚めた。何人かが荷物を棚から降ろし下車しようとしていた。私は窓の外を見た。

### 『米山温泉』

慌てて下車する。改札は閑散としていた。ぼうとしているとバスがやってきて、荷物を持った人が二人、それに乗り込んだ。運転手が大儀そうに降りてきて、手招きした。バスに乗り込むと、結構な人数の人が乗っていて、私は後部座席のスペースに何とか体を押し込んだ。

「座れました？　じゃあ行きますか」

満員のバスはがたがたと走った。

バスは二十分ほどで、温泉町に到着した。古い宿が並び、思ったより趣があって驚いた。とりあえずカニと温泉があればと思い、何も期待してなかったのだ。一泊しよう。明日もズル休みだ。そう決めると身も心も軽くなり、私は町をゆっくりと歩いてみることにした。

みな浴衣を着て歩いているからだろうか。どことなく現実離れした雰囲気漂う。泊まる宿を決めていないので飛び込みで予約しなくてはならないがどうにかなるだろう。湯けむりでたまに視界が悪くなる。そんなときけむりの向こうから、一組の背の高いカップルが現れた。相手もけむりから現れたこちらに気づき、

「こんにちは」

と言った。外国人だった。北欧美男美女、とでも言うのだろうか。金髪碧眼、透けるような肌、長い手足。そして浴衣姿。私は返事をするのも忘れ、文字通りぽかんと口を開けた。

## けむりのむこう

---

「おひとりですか？ 一緒にまわりませんか？」

女性が言った。

「えーと、えーと」

言葉につまんでいると、

「ご迷惑じゃなければ」

と男性のほうがい、

「迷惑じゃないです、迷惑なんかじゃ」

私は顔の前で手を振った。私たちは茶屋に入った。

「名前はなんていうんですか？」

男性が聞き、

「飯田荘子です。えーと」

「私は、エリアス・ハーララ。彼女はアレクサンドラ・ハーララ。フィンランドから来ました」

へえー！ 私は感心してしまった。イメージ通りではないか！ 私たちは頭を寄せあってメニューを見た。

「日本のお茶はおいしいですね」

エリアスが言うので、

「この店のは抹茶。普通のお茶よりもっと濃いんです」

と私は言った。それぞれ団子と抹茶のセットを注文する。

「フィンランドに温泉ってありますか？」

私はふと聞いた。

「いやサウナですよ。温泉はアイスランドですね。アイスランドは炎と氷の国なので」

エリアスが言う。団子が運ばれてきた。

「お茶苦い」

アレクサンドラが舌を出した。

「団子を食べるとちょうどいいですよ」

私は言った。

「そうだ宿をまだ決めてないんです。お二人はどこに泊まってるんですか？」

「東雲湯」

アレクサンドラが言った。

「外国人の間でちょっとしたうわさなんです」

「うわさ？ 人気があるんですね」

エリアスとアレクサンドラは顔を見合わせた。

「そういうことではないんですか？」

「あのね、でるんだそうです」

「でる？」

「妖怪が」

## けむりのむこう

---

東雲湯は古い温泉宿の中でもなお古く、こじんまりとしていた。いかにも極上の湯が堪能できそうな雰囲気だ。

「ようこそおいでなされました」

と出迎えてくれた老婆に、なんとなくこちらのほうが恐縮してしまう。

「こんにちは。こちらの宿で、カニは食べられますか？」

エリアスが聞いてくれた。

「はい。カニも用意できます。えと……三名様？」

「あ、私予約してないんです。泊まりますか？」

「ええ、ええ、お上がりください」

磨き上げられ、黒光りする床。

「廊下を突きあたりまして一番奥がハーラ様のお部屋。お客様は少しこちらでお待ち頂けますか？」

案内されたのは、囲炉裏のある十畳ほどの部屋だった。誰でも使えるロビーのようなところらしい。いろりの上にはやかんがぶら下がり湯気が上がっていた。老婆はお茶を入れ、

「くつろいでいて下さい。ちょっと上の部屋、用意してきますので」

と言った。他に従業員はいないのだろうか。入れ違いにエリアスとアレクサンドラがやってきた。

「なんか泊まってるの私たちしかいないみたい」

アレクサンドラが言う。

「シーズンではないものね」

私はさっき老婆がしていたようにふきんでやかんをつかみお茶を入れた。やがて老婆が戻ってきて、

「お待たせしました。二階の一番奥の部屋、ご用意しました」

と言った。二階にはいくつか扉があったが、人の気配がしない。床はやっぱりぴかぴかに磨かれ、黒光りしていた。部屋は普通の和室だった。座卓があり茶菓子やポットなどが置いてあった。窓から温泉街を見ることができた。夕暮れ時、もうもうと上がる湯気から垣間見える古い宿のつらなりや、そこからぼうともれる光は、なんだか別の世界のように、私は少し怖くなった。

囲炉裏の部屋に戻るとエリアスとアレクサンドラと老婆が談笑していた。金髪碧眼の外国人と老婆。私は落ち着かない気分で宿の外に出た。なんだか妙なところに来てしまった。そもそもおいしいカニを食べ、さっと温泉に入ったら帰るつもりだった。私は人恋しいおもいで道を歩いた。いくつかのグループとすれ違った。

「後でもう一回温泉入ろうか」

「常務の相手も大変だ」

普通の会話が聞こえてくると安心した。やっぱり一人旅なんて柄ではないなあと思いながら東雲湯に帰った。

囲炉裏でやかんが湯気をたてているのは同じだが、誰もいなくなっていた。温泉に入ろうか。私は身支度をして一階の温泉へ行った。もうもうと湯気が上がり全貌がわかりづらかった。湯は緑色でなんとなくとろりとしている。凝り固まっていたからだの疲れが嘘のようにぼぐれていくのがわかる。私は驚いた。温泉にそれほどの効用があるとは思っていなかったのだ。効用どころか魔法のようだ。うーむ、これはすごい。

## けむりのむこう

---

また囲炉裏の部屋に戻ったが、誰もいなかった。私はお茶を入れて飲みながら、いったい何の成分がお湯に入っていたのだろうと思った。ナトリウム？ カルシウム？

「お風呂、いかがでしたか？」

老婆がゆらゆらとやってきた。

「すごく……なんていうか癒されました。びっくりです」

「そうですか、それはよかった。この温泉はわしで十代目です。お客さんにそう言ってもらえれば続けてきたかがあるというもの」

「今日はお客さんは三人ですか？」

「そうですね、あまり大々的に宣伝してないのでお客さんの数は多くないんです。でもわし一人でやってるからちょうどいいです」

私はうなずきながらも、あの温泉なら宣伝しなくても客が集まりそうだけど、と思った。

「ハーララさんはお部屋ですか？」

「いえ、出かけられたみたいですよ。食事はどうされますか？ ハーララさんがあなたさえよければここでみなで食べませんかとおっしゃってました」

「そうですか、じゃあここで」

老婆はうなずき立ち上がった。

「何か手伝うことはありますか？」

「大丈夫、大丈夫。下ごしらえはすっかりできてるんです。ハーララさんが散歩から帰ってきた頃にちょうど間に合わせるようにします」

カニはおいしかった。とにかくカニづくし。とびいりの客なのに、よくこんなにカニが用意してあったものだと驚いた。ハーララ夫婦も同じメニューだった。ゆでガニ、カニのさしみ、カニの茶わん蒸し、カニのグラタンなどなど。カニは新鮮でいくらでも食べられた。エリアスは茶わん蒸しが気に入ったらしく、

「これは何？」

と、スプーンで銀杏をすくって私に見せた。囲炉裏にはやかんではなく鍋がかかり、老婆が汁をかきまわしていた。

「これもね、あたたまるからね」

魚や野菜がたっぷりと入った鍋。部屋はしばらく鍋の煮えるぐつぐつという音だけがした。

「すみません、この宿、妖怪がでるって本当ですか？」

アレクサンドラが口火を切った。老婆は鍋をよそい、アレクサンドラに渡した。

「ふふ、外国のお客さんの間で、うわさになってるようだね。妖怪。そうさね。子供のころはたんと、たーんといたよ。友達みたいなもんだった」

老婆はこともなげに言った。

「友達？」

アレクサンドラは、しゃっくりのような奇妙な声をあげた。



## けむりのむこう

---

「まあね。ここらは古い建物が多いからね。子供のころ、気づいたらよくいたよ。雨の日なんか  
にね。ふっとあらわれてこっちをじっと見てるの。そしてまたふっと消える。でもふつうだか  
らね。あんまり怖いと思わなかった」

「それって、どんな格好してるの？」

アレクサンドラはすっかり老婆の話に引きこまれている。

「さあどうだっけ」

老婆は鍋にきのこを投入した。

「着物を着てナスのような顔をしたのとか、障子紙のようにひらひらしたのとか。小さいのから  
大きいのまでいたねえ」

老婆は器に汁をよそった。

「今でも見えるんですか？」

エリアスが言うと、

「さてね、ときどき見えるような気もする。でもわしも長いつきあいだから。座布団やタンスと  
変わらんのよ。見えてても意識せんというか。でもお客さんに悪さをしたらと思うとね、心配  
だよ。かといって長年いる妖怪をどうやって追い出すのか見当もつかん」

汁をすすると体があたたまってきた。部屋に戻っても私は妖怪のことを考えていた。妖怪を  
見てみたい気もした。老婆は「悪さをする」と言っていたが、何をするのだろうか？ 電気を消し  
てふとんに入ったが寝つけず、暗闇をみまわしたりしていた。エリアスとアレクサンドラは寝て  
しまったのだろうか。部屋の外に出ると、人の気配がするような気がして下へ降りた。案の定エ  
リアスとアレクサンドラが廊下をうろうろと歩いていた。

「あ、荘子さん眠れないんですか？」

「ええ、妖怪が頭の中をうろうろしてるんです」

アレクサンドラが噴き出した。

「私たち、妖怪を見てみたくて探してたんです。でも探すとでてこないものなのかもしれないで  
すね」

私たちは囲炉裏の部屋へ行った。老婆はおらず囲炉裏の火は消え、やかんだけがぶらさがって  
いた。

「一晩泊まったぐらいじゃ妖怪は出てこないのかも」

エリアスはお茶を飲みながら言った。

「フィンランドはどんな国なんですか？」

私は聞いた。

「僕たちが住んでいるところは田舎だから……。フィンランドではサウナに入るんですよ、言いま  
したっけ。蒸気がもうもうと上がっていてそこに入るんです。で、暑くなったら外に出てそれか  
らまたサウナに入る」

「体によさそう」

私が言うと、

「でもここの温泉はすごくいい。なんていうか疲れが湯気と一緒に蒸発していくような……。日本の温泉はすごいですね」

エリアスが言うので、

「いや私もここの温泉はすごくいいと思う。いいどころか、ちょっと尋常じゃないくらい疲れが取れる」

## けむりのむこう

---

「.....もしかしてそれも妖怪がいることと関係あるのかしら」

アレクサンドラがつぶやいた。

「そうねえ、たまたま湯に妖怪が溶けていたのかも」

私は言った。

結局妖怪には会えないまま、私たちは東雲湯を後にした。エリアスとアレクサンドラとは途中で電車と一緒に帰った。フィンランドに帰ると二人に、

「妖怪騒ぎで忘れかけてたけど、今になってカニのおいしさがよみがえってきた」

と私は言った。

「そうですね。食べ物もおいしかったし、夢のような旅行でしたね」

エリアスは言った。

「フィンランドに来ませんか？」

アレクサンドラが言う。

「そうね、海外旅行したことないんだけど、旅行っていいもんだね」

旅に出る前は自分がこうやって外国の人と普通に接することができるということも知らなかった。のりかえの駅につき、二人の背の高い姿が遠ざかるのを見ながら、そういえば、なぜあんなに日本語が達者だったのだろうか、今になって疑問がわいた。妖怪よりなにより、金髪碧眼の彼らこそなんだか不思議だったと思いながら帰りの途についた。